

ブラジルでのサッカー・ワールドカップ開催中、研究で現地を訪れた社会学者のアンジェロ・イシさんに、現地の人種差別撤廃の取り組みや日本の現状について寄稿してもらった。



サッカー・ワールドカップのブラジル大会からいかなる教訓が得られるか。サッカーの話を始めたらキリがなさそうだが、ここでは移民研究者の立場から考えてみたい。

今大会でまず目にしたのは、日系移民社会の存在だ。日本代表が戦った3都市では、サムライブルーを応援する人を増やそうという活動で、日系人のボランティアが決定的な働きをした。

日本ではまったく報じら

生活

多様性に寛容なブラジル

れなかったようだが、クイアバ市でのコロンビア戦の前夜には地元の日系人200人が結集して、日本からの関係者のために盛大な歓迎会まで開いた。若いブラジル生まれの日系青年がポルトガル語なまりながらも「ガンバレ日本!」と大合唱した。日本代表がこれほどの「ホーム」気分で見える国は、ブラジルのほかにないだろう。

なぜ、日系移民はこまで「ニッポン」のために尽くしたのか。一言でいえば、ブラジルは多様なルーツを持つ人が多く、複数の国を応援することに對して寛容な国だからである。

まして日系人の場合、106年の移住史を通してブラジル社会で築いてきた確固たるポジティブなイメージがある。日本という「祖国」を応援することは、ブラジルの「ニホンジン」にとって何ら後ろめたいことではないのだ。

〈略歴〉 1967年ブラジル・サンパウロ市生まれ。武蔵大教授。サンパウロ大卒。90年に来日、ポルトガル語新聞の編集長を務めた。移民やメディアの研究のほか、国際交流や共生をテーマに講演も行う。著書に「ブラジルを知るための56章」など。

次に着目したのは、国際サッカー連盟(FIFA)と国連による差別撲滅キャンペーンだ。前回大会に続き、人種差別などあらゆる差別を弾劾する試みが展開された。

試合中にはスタジアム内で「NO TO RACISM」と表示され、試合前には口頭で反差別のメッセージが読み上げられた。ちなみに現地では長文がポルトガル語と英語でアナウンスされていたのに、日本のテレビ中継ではさりとて「今、メッセージが読まれています」で済まされてしまった。次回こそ、全文を邦訳するべきだ。

また、対戦国のキャプテンが反差別の宣言文を読み上げた試合もあった。

私は数年前から、こうした取り組みを「リーグにも

見習ってほしいと訴えてきた。今年3月に浦和レッズの「JAPANESE ONLY」横断幕事件が発生したと聞き、その確信を強めた。

日本は人種差別撤廃条約に批准しているながらも、差別を罰する国内法をいまだに整備していない。この法の壁に手をつけるのも重要だが、問題なのは差別を許容したり、レイシズム(人種差別主義)は対岸の火事だと考えたりする風潮だ。この「心の壁」を崩すための意識啓発こそがサッカー界に限らず、移民政策を模索する日本社会全体に求められている。